

論文 (Article)

マラウイ国・内水面漁業の問題と展望(4)

—チルワ湖南東部・ルンガジにおける水産資源利用の事例—

**Problems and Prospects of Inland Water Fishing
in Malawi (4):**

A Case of Lungazi~ South-Eastern Area of the Lake Chilwa~

今井 一郎

Imai Ichiro

This paper explores the economic and political dimensions of fishing activities conducted on the Lake Chilwa, Malawi, based on data obtained by the author during field researches in 2007 and 2015. This paper first gives an outline the results of earlier research carried out in the Bangweulu Swamps, Zambia in 1983, 1985 and 1994. Among the Bangweulu fishermen, the fishing methods and fishing seasons differ from one ethnic group to the next, resulting in each group mainly catching a different type of fish. For this reason, there is little friction among the groups concerning fishing rights in the area. Next, a summary of fishing activities on the Lake Chilwa is given, with reference to earlier studies. Earlier studies show that fishing activities were conducted in a way that was harmonious with the environment. Lastly, the results of research conducted by the author in 2015 are presented in contrast to the data which was obtained in the research of 2007. The research was carried out at Lungazi beach which is situated in the south-eastern area of the lake.

キーワード：チルワ湖、湿原漁撈、水産資源、資源保護、漁獲制限、土着知識(IK)

Key Words : Lake Chilwa, Swamp Fishing, Aquatic Resources, Conservation, Control of Fishing, Indigenous Knowledge,

1. はじめに

熱帯アフリカの内陸部において、湖沼や河川に生息する魚類は、地域住民の食物の中で動物性タンパク資源として重要な位置を占めてきた。マラウイ湖の周辺で発見された数千年前の人びとの遺跡から、この地域に特色ある漁民文化が育まれていたことがうかがえる(嘉田、1998)。また、英領植民地だった北ローデシア(現ザンビア)やニヤサランド(現マラウイ)では、鉱山や都市労働者人口

が集中する地域に向けて食料(魚類)を供給する水域として、バングウェウル湿原やニヤサ湖(現マラウイ湖)が重要であったという事実がいくつもの文献によって示されている(Brelsford,1946など)。この事情は現在まで継続しており、ザンビア、マラウイやジンバブウェなど中南部アフリカの内陸諸国では、水産資源を利用するために漁業局(Department of Fisheries)などの政府機関が漁民らの水産資源利用を統括・管理している。

以前の報告(2015など)にも触れたように、アフリカ内水面域に生息する魚類の利用形態については、これまで民族学、人文地理学、環境社会学的角度からいくつかの調査研究が実施されてきた(安溪,1982; 嘉田,1998; 嘉田・中山・Malekano,2002; Ichikawa,1985など)。私は、1983年以來生態人類学的観点からザンビア・バングウェウル湿原で活動する人びとの暮らしの分析を続け報告してきた(今井,1986,1991,1999,2000,2008; Imai,1985,1987,1995,1998)。その結果、バングウェウル水域では周囲に居住する複数の民族集団に属する人びとが、市場経済に深く関与して生計を維持しつつも湿原に生息する魚資源を賢明に利用している実態が明らかになった(Imai,1985,1987; Ichikawa,1985; 今井,1986)。

今井(1986)によれば、バングウェウル湿原で活動する漁民たちは、民族集団によって異なる農耕歴、本村から湿原までのアプローチの長さなどに起因する活動様式の違いから、漁域、漁時間帯や漁獲魚種を異にし、民族集団ごとに湿原をすみ分けて利用してきた。その結果、バングウェウル湿原は閉鎖的な内水面環境で複数の民族集団の漁民が活動するにもかかわらず、そこに生息する魚類などの水産資源が枯渇することなく持続的に利用されてきた、と捉えることができる。

今井(前掲)はまた、バングウェウル域の漁民たちは漁業組合を結成し、都市の市場に漁獲を売却していることをも報告した。漁民組合は、漁獲水揚げ地である湿原に点在する漁撈キャンプにおける漁獲販売価格を魚種によらず一定にしており、これが結果的に特定魚種の乱獲を防ぐ効果的な手段になっていることを指摘した(Imai, 1985: 87)。今井は、この方策は実際の漁獲動向により実現可能になる、と述べた。つまり、バングウェウル水域に生息する魚類相は年間を通じて一定ではなく、季節的に大きく変化するため、漁民、仲買人らが望む魚種が確実に手に入るわけではないからである。



図1. マラウイ国概略図
出所：今井(2012)図1を改変

漁民組合は、市場で高価に取り引きされる魚種の大量捕獲によって利益を上げるよりも、単価にかかわらず漁獲全体の重量によって利益を得る道を選んだと解釈できる(今井,1991)。すべての魚類の価格が同一なので、消費地の市場で高価に取り引きされる魚種だけが捕獲の標的にされることはないのである。Imai(1998:84-85)は、在来の民俗(土着的)知識や実践の中で生み出された知恵が、生態系維持の上で持つ意義を高く評価した。

私は、ザンビアの湿原域における調査経験を踏まえつつ、1999年からザンビアの東に隣接するマラウイ共和国南部の湿原域であるチルワ湖とシレ川下流域で行なわれる漁撈活動について現地調査を実施している。本稿でとり上げるチルワ湖は、マラウイ共和国南東部モザンビーク寄りの内陸盆地に位置する(図1、2)。マラウイ国内では、マラウイ湖に次いで2番目の広さを持つ水域である。

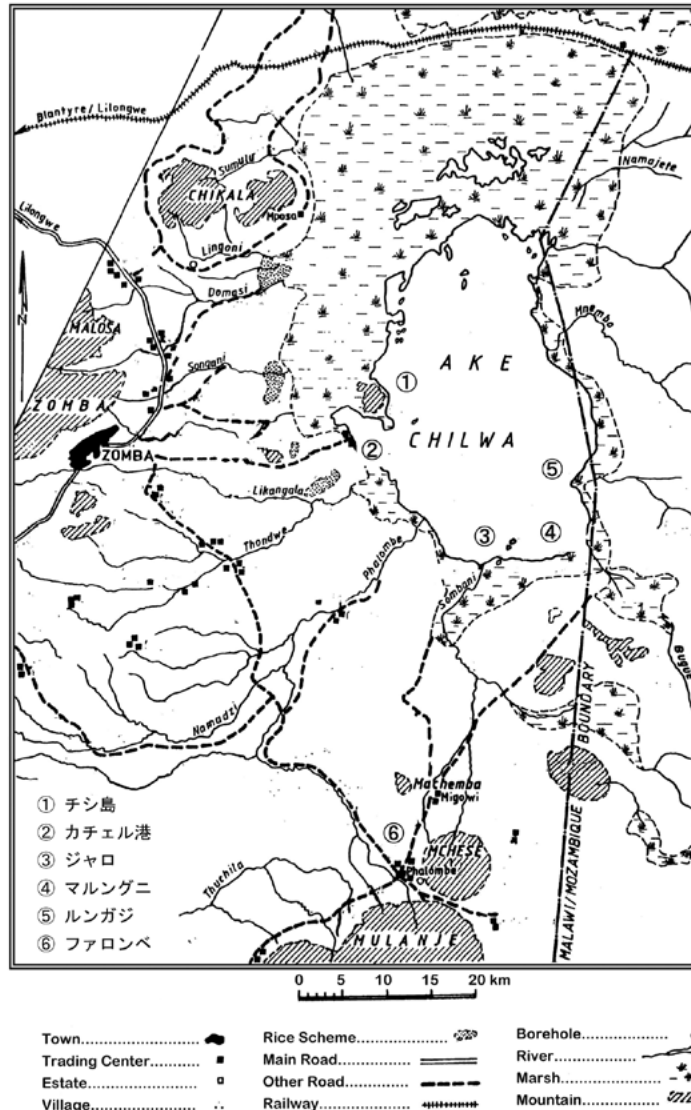


図2. チルワ湖概略図

これまでに実施した現地調査の結果、近年の市場経済の浸透が漁民社会に与えた影響を解明することが、チルワ湖における持続的な水産資源利用と管理のための重要な課題であることが判明した。

本稿では、市場経済への参入を前提とした漁撈活動が盛んになってきたマラウイ・チルワ湖南部の漁撈活動に焦点を当て、近年進んだ漁撈形態の変化を明らかにするとともに、それに伴って浮上

してきた漁民社会における新たな問題点を指摘する。さらに、マラウイ国の湿原域における魚類の持続的利用に必要な課題についても提示する。本稿の基になった資料は、1999、2000年の予備的な調査に続いて2004、2007年に実施された現地調査で得られた資料に加えて、2015年に実施したチルワ湖東南部の村落における調査で得られた。

2. マラウイにおける水産資源管理の現状と課題

マラウイ国においては、マラウイ湖のような大湖に比べ、チルワ湖水域での漁獲高が格段に少なく、経済的な重要性が低い水域である、と一般的に認識されてきた。それに加え、同水域にはマラリアを媒介するアノフェレス属の蚊が多数生息しており、他水域からチルワ湖に到来する漁民は少数であった。しかし、私が1999年以来実施してきた現地調査の結果、近年はチルワ湖水域が近隣の都市(プランタイア、ゾンバなど)を市場にした漁業経済に組み込まれている現状が明らかになった(今井、2005、2009、2013)。

マラウイ政府の統計記録によれば、1990年代に入りチルワ湖、シレ川下流域などマラウイ国内ではこれまで漁獲量が少なくマイナー視されてきた漁場で水揚げされる漁獲の比率が増加しつつある(Fisheries Department, 1994)。

マラウイ湖など大漁場における漁業は、都市部における漁獲需要の増加にともなって大規模化し漁獲量を増加させてきた。それと同時に、各漁場の総漁獲量が頭打ちになり、捕獲魚のサイズが小型化してきた現象などが指摘されている(Mususa, 2004)。私は、近年漁民の集中的な漁撈活動によりマラウイの魚資源が乱獲にさらされている現状から、以前の調査報告において水産資源利用に関する長期的ビジョンの確立が急務であると主張した(今井、2005)。従来採用された水産政策においては、西欧的な近代科学技術に基づいた資源保護政策が絶対視され、援助国や為政者は地域の自然環境についての土着的・伝統的な民俗知識や自然利用方式を無視・軽視する傾向にあったことが指摘されている(Skjonsberg, 1992)。年々進む漁獲減少に対する解決法としても、近代的科学技術に基づくとして、活動を物理的に規制する方策が採用されることが多い。特定の漁具・漁法の使用を禁止・制限するなどの排他的な措置が実施されるのである。

例えば、ザンビアでは、政府により毎年12月1日から翌年の2月28日までは、国内で全ての漁活動と漁獲売買活動が禁止されている。また、網目が1.5インチ(約3.8センチ)以下の漁網の使用は全面的に禁止されている(Republic of Zambia, 1974)。

マラウイにおいても状況は同様であり、漁業規制の補足法(1997)によれば、漁域ごとに漁船、漁具や漁法に関する詳細な規則が定められている。私がこれまでに実施した現地調査によれば、ザンビア、マラウイでは違反者に対する取り締まり体制が設備的にも人的にも整備されていないため、行政府の禁止・規制措置が資源管理の面でどの程度効果があるのか不明確である。また、この両国においては以前から採用し続けてきた漁具・漁法が政府・行政機関によって一方的に禁止されたことに対して、漁民から強い不満の声が挙げられている(今井、1999)。

近年は、Indigenous Knowledge (IK) を再評価すべきとの主張への支持が増える傾向がある。これは、西欧科学至上主義に反対する立場にも通じる。この主張に沿った論文として、Johnson ed.(1992)、Imai(1998)、Mwale & Malekano(2000)、Kalanda-Sabola et al.(2007)などが挙げられる。特定地域の自然環境と動植物の生態・行動様式に長期間触れて深く理解し、それらに適切に対応しながら生活を育んできた地域住民の土着的自然理解を、「近代化」の名の下で一方的に否定せず再評価する立場である。この立場に立った論文の多くは、両者を客観的な視点・方法で比較することで環境の持続的利用の維持を目的とする。私は、今後政府による漁業規制がトップダウン的に施行されているマラウイやザンビアのような国でも、漁民の民俗知識の客観的な評価が必要になるかも知れないと感じている。

3. チルワ湖南部における漁業の概要

3.1. チルワ湖の概要と調査史

チルワ湖は、南緯15度30分、東経5度30分付近に位置し、マラウイ湖の南東約100kmにあたる(図2)。現在のチルワ湖の総面積は約1,800km²であるが、水面が水草等で覆われていない水域(開放水面)の面積は約678km²である。湖周囲の約578km²は、季節的に浸水する草原となっている(Lancaster,1979)。湖の水深は平均4~5mである。Morgan(1971)によれば、降雨量が極端に少ない年には過去何度も渇水状態になった。表1に、チルワ湖が過去に渇水状態になった年を示した。

チルワ湖には、湖の西側に位置するシレ高地、ゾンバ山地からいくつかの河川が注ぎ込んでいる(図2)ドマシ(Domashi)、リカンガラ(Likangala)、ソンドウェ(Thondwe)、ナマズイ(Namadzi)およびパロンベ(Phalombe)川がそれらに当たる。これら5河川から注がれる水量はチルワ湖にそそぐ全水量の約70%を占める。湖南岸には、ソンバニ川が注いでいる。モザンビーク領側から流れ込むムネンボ(Munembo)、ブグウェ(Bugwe)およびチマズイ(Chimazi)川以外は、すべてマラウイ領内を流れる河川である。

チルワ湖から流れ出す河川が無いので、チルワ湖は湖水に栄養塩類が蓄積しやすい。Kabwazi & Wilson(1998)とJamu et al.(2006)によれば、チルワ湖の生態系はアフリカ大陸の内水面域の中で最も魚類生産力が高いという。チルワ湖は、生息する魚類の種数が少なく、シクリッド科、ヒレナマズ科とコイ科を中心にした魚種にとどまる(Furse et al.,1979; Kabwazi & Wilson,1998)。

1964年にマラウイ国が独立してから、チルワ湖では1960年代後半に生物学者らが広域調査を実施した。それに引き続いて、マラウイ大学チャンセラー校生物学科のメンバーが中心になり大規模な調査が実施された。*Lake Chilwa Monograph*(Kalk et al.,1979)が調査報告として残されている。

チルワ湖をラムサール条約の保護区に指定するというマラウイ政府の申請に先立って、同大学生物学科のメンバーは1996年から再びチルワ湖の生物学的調査研究に乗り出した。この調査は、チルワ湖が生物学的見地から見て貴重な水域であることを科学的に示す、保護区指定の科学的根拠を得るための調査でもある。その後、チルワ湖は1997年にラムサール条約湿地に指定された。

近年は、マラウイ国の急激な人口増加と代替的な生業が乏しい状況に置かれているチルワ湖における水産資源の持続的利用と管理について、マラウイ大学社会科学研究所やマラウイ水産局のスタッフが環境社会学的視点も含めた総合的な研究(Njaya,F.(2007, 2014), Mvula et al., 2014)を開始している。この内容の一部については「考察」で触れる。

表1. チルワ湖の水位が低かった年 (1900年以来)

1900	
1914~ 1915	大旱魃
1922	
1931~ 1933	
1934	
1954	
1960~ 1961	
1968	大旱魃
1973	大旱魃
1995	大旱魃

出所：Kabwazi & Wilson(1998)を基に作成

3.2. チルワ湖における漁業の概要

チルワ湖西南岸地域(パロンベ県、ゾンバ県)の住民は湖岸の湿地帯に漁撈キャンプを設置して漁撈活動に依存した暮らしを営んでいた(Williams, 1969; Agnew & Chipeta, 1979)。Kabwazi & Wilson (1998)によれば、チルワ湖で漁撈活動に従事する漁民は年間約6,000名に達し、年間の総漁獲量は20,000トン以上に上る、とのことである。漁民以外にも、漁獲仲買業や漁獲の流通・運搬業などに携わる人々の数も加えると、合計180,000人ほど

表2. チルワ湖に生息する魚種

科	種
Mormyridae (モルミルス科)	<i>Marsenius macrolepidotus</i> <i>M. livingstoni</i> <i>Petrocephalus catostoma</i>
Characidae (カラシン科)	<i>Hemigrammopetersius barnadi</i> <i>Alestes imberi</i>
Cyprinidae (コイ科)	<i>Barbus cf.afrohimitoni</i> <i>B. kerstenii</i> <i>B. paludinosus</i> <i>B. trimaculatus</i> <i>B. cf.viviparus</i> <i>B. sp. B</i> <i>B. sp. C</i> <i>Labeo cylindricus</i>
Bagridae (ギギ科)	<i>Leptoglanis rotundiceps</i>
Clariidae (ヒレナマス科)	<i>Clarias gariepinus</i> <i>C. theodorae</i>
Schilbeidae (シルベ科)	<i>Pareutropius longifilis</i>
Mochokidae (サカサナマス科)	<i>Chiloglanis neumanni</i>
Amphiliidae *(アンフィリウス科)	<i>Amphilius platyichir</i>
Cyprinodontidae (メダカ科)	<i>Aplocheilichthys johnsonii</i> <i>Nothobranchius kirki</i>
Chichlidae (シクリッド科)	<i>Haplochromis callipterus</i> <i>Haplochromis sp.</i> <i>Pseudocrenilabrus philander</i> <i>Oreochromis shiranus chilwae</i> <i>Tilapia rendalli</i>

出所：Kirk (1967) を基に作成

* 安溪 (1982) の科名を用いた

表3. アフリカ大陸の水域における魚類産出量
(チルワ湖は1976年の記録)

水域	面積(km ²)	生産高(kg/ha/年)
チルワ湖(マラウイ)	1256	159
マロンベ湖(マラウイ)	406	131
キオガ湖(ウガンダ)	2280	80
ルクワ湖(タンザニア)	2202	36
ムウェル湖(ザンビア)	1540	19
ナイバシャ湖(ケニア)	140	14
バングウェル湖(ザンビア)	7777	9

出所：Fryer & Iles(1972); Furse et al.(1979) より改変

に達する。Kalk et al.(1979)によれば、チルワ湖においては10科26種の魚種が記録されている(表2)。チルワ湖の漁業は、全水域の約30%を占める湿原域における漁撈活動が活発である。シクリッド科のマクンバ(*Oreochromis shiranus chilwae*)、ヒレナマス科のムランバ(*Clarias gariepinus*)とコイ科のマテンバ(*Barbus paludinosus*)の3種の魚類が主要な漁獲魚種である。

Kabwazi & Wilson(1998:95)は、チルワ湖と中部アフリカ諸地域に分布するいくつかの湖における面積当たり漁獲量の比較から、チルワ湖の漁獲生産性がマロンベ湖(マラウイ)と並び他の湖に比して高いことを示している(表3)。この事実から、動物性タンパク質を含む食料が慢性的に不足しがちなマラウイ国の住民にとって、チルワ湖、マロンベ湖における漁業が果たす役割は極めて大きいと言える。一方で、漁獲量は水位の変動によって大幅に変動する。水位が極端に低下した時期である1914～1915年、1968年および1973年には、チルワ湖の漁業は壊滅に近い状態だったという。一度水位が低下すると水位の回復には通常3,4年間を要し、漁獲量の回復にはその約2倍の期間がかかる、とのことである(Kabwazi & Wilson, 1998)。近年はチルワ湖の周囲で大規模灌漑農業の事業が進んでおり、チルワ湖に注ぐ河川の水が大量に利用され始めていることに水位低下の原因があるのではないかと、という疑問が住民からの聞き取り調査で挙げられていた。

チルワ湖の水位変動などにより漁獲が大幅に低下した時期には、チルワ湖周辺住民の活動に変化が生じる。そのような時期には、住民は漁業を止めて雑貨小売業や宿泊施設の経営などへの転職を図る(Allison & Mvula, 2002)と報告されている。私が2007年に実施した聞き取り調査においても、チルワ湖南岸のスワンゴマ集落付近の住民は、湖の水位が低下した年には男女とも隣国のモザンビークまで出稼ぎ労働に出たという。

4. 市場経済とチルワ湖南岸における漁業の変化

前述の通り、私は2004年8月24～26日、2007年8月11～13日と8月27～29日にわたりチルワ湖南岸で現地調査を実施した。マラウイ水産局が1992年に実施した調査の記録(Annual survey)によれば、ジャロ、マルングニがチルワ湖南岸の主要な漁獲水揚げ地である。それらの水揚げ地点には多くの漁民と魚仲買人が集中するため、私はこの2地点を調査地として選択した。いずれの水域でも、漁民たち(漁撈ユニット)は刺し網漁、延縄漁、籠漁、マテンバ魚を対象にした湖岸からの地引き網漁、マクンバ魚を対象にした船上からの地引き網漁(ンカチャ網漁)などに従事している。

ジャロとマルングニ付近に居住する人びとは、大半がロムウェである。栗田(2000:767)の記述によれば、ロムウェは中央バントゥ語族に属する

母系制出自システムをもつ民族集団である。ロムウェはマラウイ南部からモザンビーク北部にかけてのサバンナ地域に居住し、主として農耕活動に従事する。マラウイ国内のロムウェの総人口は100万人以上に達するとされる。

チルワ湖南岸の主要な漁獲水揚げ地点であるジャロ、マルングニにおいては、毎日早朝と夕方に岸に戻ってくる漁船のそばに仲買人らが集まり、各漁船の漁獲内容を確認し漁撈ユニットとの間で漁獲買い付けの交渉を始める。私は、交渉を終えた漁民と仲買人らが無作為に選択して、付録に示した調査項目に従って個々の対象者と対面的に行った。2007年の聞き取り結果については、既に『アフリカ研究』87に発表した(表4、5、今井、2015)。

表4. 漁民の聞き取り結果(ジャロ)・2007年8月

民族	本村(県)	漁法	漁期(月)	漁時間帯
1. ロムウェ	バロンベ	地引網	4～12	日中
2. ロムウェ	バロンベ	地引網	4～11	日中
3. ロムウェ	バロンベ	地引網	4～11	日中
4. ロムウェ	バロンベ	延縄漁	11～3	日中
5. ロムウェ	バロンベ	地引網	1～11	日中
6. ロムウェ	バロンベ	地引網	1～12	夜間
7. ニャンジャ	バロンベ	地引網	1～10	夜間
8. ロムウェ	バロンベ	地引網	1～3	夜間
9. ロムウェ	バロンベ	地引網	3～12	夜間
10. ロムウェ	バロンベ	地引網	4～8	夜間

筆者作成(2007年8月の聞き取り調査による)

表5. 魚仲買人の聞き取り結果(ジャロ)・2007年8月

性別	民族	漁獲運搬法	売却地	売却法
1. 男	ロムウェ	籠, 自転車	バロンベ	小売り, 卸し
2. 男	ロムウェ	籠, 自転車	バロンベ	?
3. 男	ロムウェ	袋, 自転車	バロンベ	?
4. 男	ロムウェ	籠, 自転車	ミゴウィ	?
5. 男	ロムウェ	籠, 自転車	チリンガ	小売り
6. 男	ロムウェ	籠, 自転車	チワロ	小売り
7. 男	ロムウェ	籠, 自転車	チワロ	小売り
8. 女	ロムウェ	籠, 徒歩	チナニ	小売り

筆者作成(2007年8月の聞き取り調査による)

5. 調査結果

私は、2015年8月に実施した現地調査において、チルワ湖南東岸に位置するマラウイ領のルンガジという漁獲水揚げ地域を訪問し、調査を実施した。ルンガジ地域の集落はチルワ湖の東岸・モザンビーク側に位置するがマラウイ領とされており、この地域に分布する集落は行政的にはゾンバ県に所属する。ルンガジを管轄するチソニ村のチーフ(traditional authority)によれば、ルンガジ周辺の集落は、チルワ湖南岸域の住民らが1920年頃に耕地を拡大するためチルワ湖の南東岸を北上して到達し、湖岸に集落を設立して形成された、という。ルンガジ地域には、チソニの他クンピニ、ムボロマ、ゴンベという集落が存在し、調査時の全人口は約450名とのことだった。湖岸の集落近辺の耕地は、移住した当時人びとが同伴したウシ、ヤギおよびヒツジなどの家畜が急増して栽培作物の食害が激しかったため、湖岸近くの耕地はほとんど放棄された。現在は、多くの耕地は内陸のモザンビーク領内に分布している。人びとは以前主としてメイズ、イネを栽培していた、という。現在は、多くの人びとがキャッサバとイネの栽培に従事している。また、周辺の水域に魚類が多く生息していることから、現在ルンガジ付近で活動する人びとは、ほとんどが漁民、仲買人および漁獲運搬業者など漁業関係の仕事に従事している。ルンガジ地域における漁民、仲買人などからの聞き取り調査によれば、漁民はチソニ、ゴンベなど地元住民に加えて、パロンベ出身者が多く、魚仲買人の出身地はパロンベ、ムランジェが多かった(表5～11)。ルンガジから至近距離にあるモザンビーク領内から魚類の売買のために来る人びとはごくわずかである、とのことだ。

私は、チルワ湖南部(ジャロ、マルングニ)における調査同様に、ルンガジ周辺の2か所の水揚げ地点(チソニ、ンゴンベ)における調査においても漁民と仲買人らから同じ質問項目について聞き取りを

行なった(付録)。2015年の調査に当たっては、マラウイ・サリマ水産局調査員のA. シンコマ氏とゾンバ水産局調査員のD. マンダ氏の助力を頂いた。

以下に、2015年にルンガジ周辺で得られた調査結果をまとめる。

5.1. 2015年の調査結果

調査地：ルンガジ(チソニ、ゴンベ)

ア. 漁民(チソニ)

漁民の民族性は、1名がチェワであったが他は全てロムウェであった。彼らの本村はパロンベ県とゾンバ県が約半数ずつを占めていた。ゾンバ県に本村があるすべての漁民の本村はルンガジに立地している。ゾンバ県(チソニ、ンゴンベ)、パロンベ県に本村を持つ各漁撈ユニットが採用する漁法については、全ての漁撈ユニットがンカチャ漁(船上からの引き網漁)を採用していた。漁期は乾期(3月～11月)に集中している(表6、7)。

漁民(ゴンベ)

合計12名の漁民からの聞き取りによれば、ロムウェ9、ニャンジャ2、チェワ1名であった。チルワ湖沿岸の他水域で漁撈活動に従事する漁民と同じく、漁民の民族性はロムウェが大多数を占める。彼らの本村はゾンバ県(チソニ、ゴンベ)7名、パロンベ県4名であり、マラウイ湖沿岸部のマンガチ県に本村を持つ漁民が1名であった。彼らが採用する漁法は、ンカチャ漁が9名で多数を占めるが、籠漁(モノ)(2名)と刺し網漁(1名)に従事する漁民もいた。

イ. 仲買人

表10によれば、チソニにおける調査時に確認した仲買人14名の民族性は、すべてロムウェであった。彼らの出身地域は、ムランジェとルンガジ(チソニ、ゴンベ)およびパロンベが大半を占めるが、ティヨロ、ゾンバと

Imai, I., Problems and Prospects of Inland Water Fishing in Malawi (4)

表6. 漁民の聞き取り結果(チソニ)・2015年8月

民族	本村(県)	漁法	主な漁期	主な漁獲魚
1. ロムウエ	チソニ	ンカチャ (船上引網漁)	?	ムランバ、マクンバ、マテンバ
2. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	3～11月	ムランバ、マクンバ、マテンバ
3. ロムウエ	ゴンベ	ンカチャ	3～10月	同 上
4. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	3～10月	同 上
5. ロムウエ	チソニ	ンカチャ	3～4月	同 上
6. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	4～7月	同 上
7. ロムウエ	チソニ	ンカチャ	3～11月	同 上

筆者作成(2015年8月のマンダの聞き取り調査による)

表7. 漁民の聞き取り結果(チソニ)・2015年8月

民族	本村(県)	漁法	主な漁期	主な漁獲魚
1. ロムウエ	ゾンバ(チソニ)	ンカチャ	3～4月	ムランバ、マクンバ、マテンバ
2. ロムウエ	ゾンバ(チソニ)	ンカチャ	2～3月	ムランバ、マクンバ、マテンバ
3. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	3～4月	同 上
4. チェワ	パロンベ	ンカチャ	2～3月	同 上
5. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	2～3月	同 上
6. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	2～3月	同 上

筆者作成(2015年8月のンコマの聞き取り調査による)

表8. 漁民の聞き取り結果(ゴンベ)・2015年8月

民族	本村(県)	漁法	漁期(月)	漁時間帯
1. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	4～12	日中
2. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	4～11	日中
3. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	4～11	夜間
4. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	2～4	夜間
5. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	10～	夜間
6. ロムウエ	パロンベ	ンカチャ	10～	日中
7. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	10～	日中
8. ロムウエ	ゾンバ	ンカチャ	1～3	日中
9. チェワ	マンゴチ	ンカチャ	12～4	夜間

筆者作成(2015年8月のンコマの聞き取り調査による)

表9. 漁民の聞き取り調査(ゴンベ)・2015年8月

民族	本村(県)	漁法	漁期(月)	漁時間帯
1. ロムウエ	パロンベ	籠漁	2～8	夜間
2. ニャンジャ	ゾンバ	籠漁	2～7	夜間
3. ニャンジャ	ゾンバ	刺し網漁	1～3	夜間

筆者作成(2015年8月のマンダの聞き取り調査による)

表10. 魚仲買人の聞き取り結果(チソニ)・2015年8月

性別	民族	漁獲運搬法	出身地	主な売却地	売却法
1. 男	ロムウエ	自転車、バス	ルンガジ	リンベ	卸し
2. 男	ロムウエ	自転車	パロンベ	パロンベ	卸し
3. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
4. 男	ロムウエ	籠、自転車	パロンベ	ムランジェ	卸し
5. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
6. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
7. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
8. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
9. 男	ロムウエ	籠、自転車	ムランジェ	ムランジェ	卸し
10. 男	ロムウエ	籠、自転車	ルンガジ	モザンビーク	卸し
11. 女	ロムウエ	籠、自転車	モザンビーク	モザンビーク	卸し
12. 女	ロムウエ	籠、徒歩	ゾンバ	モザンビーク	卸し
13. 男	ロムウエ	籠、自転車	ティヨロ	ティヨロ	卸し
14. 男	ロムウエ	籠、自転車	パロンベ	パロンベ	卸し

筆者作成(2015年8月のマンダの聞き取り調査による)

表11. 魚仲買人の聞き取り結果(ゴンベ)・2015年8月

性別	民族	漁獲運搬法	出身地	主な売却地	売却法
1. 男	チェワ	籠、自転車	パロンベ	モザンビーク	卸し
2. 男	ロムウエ	籠、自転車	パロンベ	パロンベ	卸し
3. 男	ロムウエ	籠、自転車	ゴンベ	ムランジェ	卸し
4. 男	ロムウエ	籠、自転車	ティヨロ	パロンベ	卸し
5. 男	ロムウエ	籠、自転車	ティヨロ	ムランジェ	卸し

筆者作成(2015年8月の聞き取り調査による)

モザンビークが1名ずつ見出された。漁民から買い取った漁獲の販売先はムランジェなどマラウイ国内の市場が多いが、モザンビークの市場で販売する仲買人も見られた(表10, 11)。仲買人たちが魚を卸すモザンビークの市場は、ムランジェやパロンベなどマラウイ領内の市場より近距離にあるが、彼らの多くはマラウイ内に分布する市場まで入手した漁獲を運搬し販売する。仲買人の多くは、通常はマラウイの市場まで自転車に漁獲を入れた籠を載せ市場まで運搬する。チルワ湖南岸の漁獲水揚げ地であるスワンゴマ、ジャロまで購入した漁獲をボートで運搬する仲買人もいるが、モザンビーク領内を通過しチルワ湖の東岸を南下してマラウイ国の市場に至る運搬ルートが定着している。

6. 今後の課題

私は前稿(今井, 2015)において、チルワ湖南岸域(ジャロ、マルングニ)の漁撈ユニットの採用する漁法が船上からの引き網漁に集中する傾向を見せ、刺し網漁に従事する漁撈ユニットとの間にコンフリクトが発生している、という近年の現象を報告した。ルンガジ地域周辺の漁獲水揚げ地(チソニ、ゴンベ)における漁民と魚仲買人らからの聞き取りによれば、漁民、仲買人の民族性はロムウエがほとんどを占める。彼らの多くは出身地域がルンガジ周辺の村落かムランジェ、パロンベなどチルワ湖南岸の村落である。ルンガジから至近距離にあるモザンビーク領内の村落からの出漁者はわずかであり、漁獲の売却先はほとんどがマラウイ領内の市場とのことであった。私の聞き取りによれば、この地域の人びとはマラウイの通貨であるマラウイ・

Imai, I., Problems and Prospects of Inland Water Fishing in Malawi (4)

クワチャを用いており、漁獲以外の物資の現金取引でもマラウイ・クワチャを用いている。

ルンガジ地域で活動する人びとが、通常の経済活動の中でマラウイ・クワチャを用いていることから、漁獲の流通面でモザンビーク側との関係はマラウイに比べて格段に弱いものになる、と考えられる。以上から、チルワ湖南部においてはマラウイ人が経済的にモザンビーク側への進出を強める傾向が強い、と言える。

今後の調査研究においては、チルワ湖南東の水域(ルンガジ周辺)において漁業に携わる人々からの聞き取りを重ね、モザンビーク領内で営まれている農業活動の実態をより明らかにする必要がある。さらに、チルワ湖北岸と西岸域で漁業に従事する人びとの暮らしを解明しチルワ湖東岸域と対比させることに意味がある、と考えられる。それによって、チルワ湖周辺の住民社会による資源利用の実態と資源利用の原理を総合的に解明することができるからである。

謝辞

調査を進めるに当たっては、マラウイ国および同国チルワ湖の近辺の人びとから多くのご協力を頂いた。中でも、チルワ湖南東部のルンガジ地域と周辺部(チソニ、ゴンベ)付近で貴重なお話を聞かせて頂いた漁民、仲買人の皆様には深く感謝したい。聞き取り調査の実施にあたっては、マラウイ大学チャンセラー校専任講師・生物学科長のチャンガデア氏、同校専任講師のR. ボスコ氏のご協力を頂いた。チルワ湖南東部の現地調査においては、チソニ村・チーフのA氏、サリマ水産局・主任研究員のA. シコマ氏とゾンバ水産局・調査員のD. マンデ氏から多大なご協力を頂いた。

参考文献

- Agnew,S. and C.Chipeta(1979) "Fishing and Fish Trading: Economic Studies" in M.Kalk, A.J.Mclachlan, and C.Howard-Williams(eds.) *Lake Chilwa: Studies of Change in a Tropical Ecosystem*, Monographiae Biologicae Vol.35, Dr.W.Junkl b.v.Pubkshers, The Hague-Boston-London,pp.343-368.
- Allison,E.H. amd M.P.Mvula (2002) "Fishing Livelihoods and Fisheries Management in Malawi" *LADDER Working Paper* 22:1-30.
- Ambali,A.J.D.. and H.H.Kabwazi(1999)"The Study of Fish Reproductive Biology in Lake Chilwa and Mpoto Lagoon with Special Reference to Fishery Conservation Measures and in Relation to Changes in Lake Regime" *State of the Environment Study* 6:1-52.
- 安溪遊地(1982)「ザイール川とタンガニイカ湖漁撈民の魚類認知の体系」『アフリカ研究』21：1-56.
- Brelford,W.V.(1946) *Fishermen of the Bangweulu Swamps: A Study of the Fishing Activities of the Unga Tribe*, Manchester University Press.
- Fisheries Department (1994) *Annual Frame Survey*, Fisheries Department, Ministry of Agriculture, Malawi.
- Fryer,G. and T.D.Iles(1972) *The Cichlid Fishes of the Great Lakes: Their Biology and Evolution*, Oliver and Boyd, London.
- Furse,M.T.R.G. Kirk, P.R.Morgan and D.Yweedle(1979) "Fishes: Distribution and Biology in Relation to Changes" in M.Kalk, A.J.Mclachlan and C.Howard-Williams (eds.), *Lake Chilwa: Studies of Change in a Tropical Ecosystem*, Monographiae Biologicae vol.35, Dr.W.Junk b.v.Publishers, The Hague-Boston-London, pp.175-208.
- Ichikawa,M.(1985) "A Comparison of Fishing Strategies in the Bangweulu Swamps", *African Study Monographs, Supplementary Issue* 4:25-48.
- Imai,I.(1985)"Fishing Life in the Bangweulu Swamps: A Socio-ecological Study of the Swamp Fishermen in Zambia", *African Study Monographs, Supplementary Issue* 4:49-88.
- 今井一郎(1986)「スワンプ漁撈民の活動様式—ザンビア・パンゲウエル・スワンプの事例から」『アフリカ研究』23：1-28.
- Imai,I.(1987) "Fishing Life in the Bangweulu Swamps (2):An Analysis of Catch and Seasonal Emigration of the Fishermen in Zambia", *African Study Monographs, Supplementary Issue* 6:33-63.
- 今井一郎(1991)「スワンプの漁師たち—ザンビア、パンゲウエル・スワンプにおける定置網漁師の活動」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社. pp.487-505.
- Imai,I.(1995)"Stationary Gillnet Fishing in the Bangweulu Swamps: Fishing and Trading Strategies", *Humanities & Economics* 30:1-30.
- Imai,I.(1998)"Sustainability of Fishing in the Bangweulu Swamps, Zambia", *African Study Monographs* 19(2):69-86.
- 今井一郎(1999)「パンゲウエル・スワンプにおける魚資源の持続性について」『人文社会論叢』3：1-16.
- 今井一郎(2000)『パピルスの賦』近代文藝社。

- 今井一郎(2005)「マラウイ国・内水面漁業の問題と展望—シレ川下流域の事例から—」『総合政策研究』21: 15-26.
- 今井一郎(2008)「熱帯湿原の追い込み漁—ザンビア・バングウェウル湿原の事例から—」『総合政策研究』28: 135-148.
- 今井一郎(2009)「マラウイ国・内水面漁業の問題と展望(2) —チルワ湖南部の事例から—」『総合政策研究』31: 131-140.
- 今井一郎(2013)「マラウイ国・内水面漁業の問題と展望(3) —エレファントマーシュ、バングラ・ラグーンの事例を中心—to—」『総合政策研究』42: 1-12.
- 今井一郎(2015)「マラウイ湿原域における水産資源利用の変化に関する一考察—チルワ湖南部の事例から—」『アフリカ研究』87: 65-76.
- Jamu, M.D., M.D.Leanda, and E.C.Christine (2006) “Transboundary Management Plan for the Lake Chilwa Catchment Area”, *Highlighting the Impacts of North-South Research Collaboration among Canadian and Southern Higher Education Partners*, Association of Universities and Colleges of Canada. Pp.33-44.
- Johnson, M.(ed.)(1992) *Lore : Capturing Traditional Environmental Knowledge*. International Development Research Centre, Ottawa.
- 嘉田由紀子(代表)(1998)『アフリカ・マラウイ湖周辺の人びとの湖沼に関わる生活文化に根ざした生態系保全の方法開発に関する研究—琵琶湖地域との比較の視点を含めて』トヨタ財団最終報告書。平成8, 9, 10年度.
- 嘉田由紀子・中山節子・L.Malekano (2002)「ムブナはおいしくない? アフリカ・マラウイ湖の食文化と環境問題」宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動』人文書院、pp260-283.
- Kabwazi, H.H. and J.G.Wilson (1998) “The Fishery of Lake Chilwa”. In K. van Zergern and M.P. Munyenembe, *The Lake Chilwa Environment, A Report of the 1996 Ramsar Site Study*. Department of Biology, Chancellor College, University of Malawi. pp.91-108.
- Kalanda-Sabola, M.D.E.M.T.Henry, E.Kanyambazinthu and J.Wilson (2007) “Use of Indigenous Knowledge and Traditional Practices in Fisheries Management: A Case of Chisi Island, Lake Chilwa, Zomba.” *Malawi Journal of Science & Technology* 8:009-029.
- Kalk, M.A.J.Maclachlan and C.Howard-Williams(eds.)(1979) *Lake Chilwa : Studies of Change in a Tropical Ecosystem*. Monographiae Biologicae Vol.35. Dr.W.Junk b.v.Publishers, The Hague-Boston-London.
- Kirk, R.G.(1967) “The Fishes of Lake Chilwa”, *Soc.Mal.J.*20(1):35-48.
- 栗田和明(2000)「ロムウェ」綾部恒雄監修『世界民族事典』弘文堂。p.767.
- Lancaster, N.(1979) “The environment setting: the changes in the lake level.”, in M.Kalk, A.J.McLachlan and C.Howard-Williams(eds), *Lake Chilwa: Studies in a Tropical Ecosystem*, Monographiae Biologicae Vol.35, Dr.W.Junk b.v.Publishers, The Hague-Boston-London, pp.41-58.
- Malawi Government (1997) “*Fisheries Conservation and Management Act 1997(No.25 of 1997)*”, The Government Printer, Zomba, Malawi.
- Morgan, P.R. (1971) “The Lake Chilwa Tilapia and its Fishery”, *African Journal of Tropical Hydrobiology of Fish* 1(1): 51-58.
- Mususa, N.C.J.(2004) *Nsanje District State of Environmental Report on Fisheries Resources*. Produced at Bangula Fisheries Station, Department of Fisheries, Malawi.
- Mvula, P., M.Kalinekafe, P.Kishindo, E.Berge and F.Njaya (eds.), (2014) *Towards Defragmenting the Management System of Lake Chilwa Basin, Malawi*. LIT Verlag Munster.
- Mwale, G. and L.Malekano (2000) *Indigenous Knowledge Systems in the Management of Natural Resources: Problems and Prospects: Some Lessons from Chembe Fishing Village*, Chancellor College, Zomba.
- Njaya, F. (2007) “Governance Challenges for the Implementation of Fisheries Co-Management: Experiences from Malawi”, *International Journal of the Commons* 1(1): 123-139.
- Njaya, F. (2014) “Challenges in the management of the Lake Chilwa”, in P.Mvula, M.Kalindekafe, P.Kishindo, E.Berge and F.Njaya (eds.), *Towards Defragmenting the Management System of Lake Chilwa Basin, Malawi*, LIT Verlag Munster, pp.37-46.
- Republic of Zambia (1974) *The Fisheries Act*. Ch.314 of the Laws of Zambia, Government Printer, Lusaka, Zambia.
- Skjonsberg, E. (1992) “Man, Money and Fisheries Planning: The Case of the Northern Province of Zambia”, in I.Tvedten and B.Hersong (eds.), *Fishing for Development : Small-Scale Fisheries in Africa*, Nordika Afrikainstitutet, Uppsala, pp.155-172.
- Van Zegeren, K., and M.P.Munyenembe (eds.) (1998) *The Lake Chilwa Environment, A Report of the 1996 Ramsar Site Study*, Department of Biology, Chancellor College, University of Malawi.

付録：チルワ湖南部の調査で用いた質問票

Interviewee's Name , Date, Village, District,
Name of Market/Fishing ground

★to fisherman

1. (i) Name of informant, Ethnic group, Sex
(ii) Name of village, District
2. (i) Fishing method (local name)
(ii) Number of the unit member
3. Fishing season (month)
4. (i) Fishing grounds (area)
(ii) Fishing gears
5. Do you preserve the fish after catching?
6. Where do you sell fish?
7. Fish price (How much per unit?)

★to fish trader

1. (i) Name of informant
(ii) Name of village, District
2. How do you buy fish? (by cash or barter)
3. Where do you go to sell fish?
4. How do you carry fish to sell? (by bicycle,
on foot or by vehicle)
5. How long do you stay in this point to buy
fish?